

「う、うぐう……」

可愛らしいステージ衣装に身を包んだありすは中腰で腹を抱えた。

「お、おねがい……」

グルルと唸る腹にありすはキュツと下唇を噛み、プロデューサーを見た。  
プロデューサーは醜い容貌をニタニタさせ笑った。

「どうしたの、ありすちゃん……？」

腹を抱え脂汗をかく少女の潤んだ目を見てプロデューサーは不思議そうに腰をかがめた。

「お腹押さえて、苦しいの？」

「うぐぐう……」

ありすの腹から腸の動くグルルという音が大きく聞こえた。

「……」

恥ずかしそうに顔を赤くするありすにプロデューサーはまだわからないといった顔をした。

「もしかして、お腹が空いてるの？」

「……」

憎しみの籠った目で自分を見るありすにプロデューサーは白々しい顔で顎に手を置いた。

「お腹も空いてない。でも、お腹は鳴る……どういうこと？」

不思議がるプロデューサーにありすは悔しい気持ちを抑え、腹を抱えたまま顔を上げた。

「お、おねがいします……お、おしりのせんを……」

グルルと腹が鳴り、ありすはボロボロと涙を流し懇願した。

「おしりのせんをぬいてうんちさせてください……」

「お尻の栓？」

気付いたようにプロデューサーは腹を抱え苦しむありすの後ろに回り、スカートの裾を上げた。

「お尻の栓って、これのこと？」

「ハイ……」

スカートの裾を上げられ、ありすは真っ赤になった。

「み、みないでえ……」

「……」

上げられたスカートの下にパンティーは穿かれておらず、裸の双球がぷりぷりとプロデューサーの前で振られてた。

「可愛いお尻だね」

まるで小動物を見るように優しい顔を見るとプロデューサーは気づいた。

「ああ、これのことか？」

尻タブを広げるとプロデューサーは下品に笑った。

「そういえば一週間前にありすちゃんのお尻にイチジク浣腸してプラグをハメたっけ？」

プロデューサーはありすの肛門に刺さった巨大なプラグの持ち手となる輪に手をかけ、グリグリと弄った。

「や、やめでえ……」

腹の中の内容物が出口を求め暴れだすとありすは口の端から涎を垂らし歯を食いしばった。

「うぎいいいい……」

想像を絶する便意の激痛に目を回すありすにプロデューサーは気づいたように聞いた。

「てことはありすちゃん、一週間もウンチしたいの我慢して生活してたの？」  
驚いたようにありすの腹を撫でた。

「辛くなかった、そんなにウンチを溜めて？」  
白々しく心配する態度をとるプロデューサーにありすはキツと目線を吊り上げた。

(よ、よくそんなことばが……)

この一週間、どんなに慈悲をこいてもプラグを抜かず、むしろ便通にいい食事ばかり与えてきたこのプロデューサーにありすは悔しさに涙が流れた。

そんなありすの目線にプロデューサーはニヤツと笑った。

「そんな態度でいいの？」

スーツの胸ポケットから一枚の写真を取り出した。

「ヒイ……」

写真の絵を見てありすの顔が真っ青になった。

「ありすちゃんも年頃だねえ♪」

写真に映った風呂場でシャワーを浴び、大股を広げて手で自慰行う自分の姿を見てありすはガチガチと歯を鳴らした。

歯を鳴らし怯えた顔をするありすにプロデューサーはニタニタと笑った。

「クール〇学生美少女橘ありすは休日の夜はシャワーに打たれながらアへ顔でオナニーするのが好きなんて、ファンが知ったら」

クツクツクツと笑うプロデューサーにありすは生きた心地をなくし背中に寒気を覚えた。

「……」

手でフリフリと振られる自分の痴態を見てありすは俯いた。

いつから盗撮されていたかは知らない。

ある日、大嫌いなプロデューサーに呼び出され見せられた写真からありすの日常は劇的に変化した。

そう、悪い方向に……

最初は軽いキスをしたり胸や尻を触られる程度のイタズラで済んでいた。

だが時間が経つごとにプロデューサーのイタズラは限度を無くし酷くなっていった。

下着を全て奪われライブで踊らされたこともあった。

プライベートではシャワーシーンの写真以上に淫らなポーズで写真を撮られたこともあった。

思い出すだけでも吐き気すら覚えることを何度もされた。

そして一週間前、ついに限度を超えたセクハラはありすの穢れを知らない腸内にイチジクの浣腸を流し込み、排泄できないようプラグという栓を刺され放置されるという苦痛を伴う責めにまで至った。

もう腹の中は詰まりに詰まった便が膨れ上がり腹を裂いて出ようと暴れまわり激痛が襲っていた。

「ぐう……うう」

一週間も排泄を封じられしかも今はライブのため下着全て奪われていた。

今着ているステージ衣装の下は下着を全て奪われ全裸となっていた。

裸の乳首が服の上からもわかるほどピンツと勃起、ありすの顔は羞恥と便意の苦しみに堪え、ウツトリするくらい色っぽい顔になっていた。

「お、おねがいします……」

裸同然のステージ衣装の上の腹を押え、ありすはプルプル震えながら哀願した。

「も、もうげんかいなんですう」

気が狂いそうなほど腸内の便が暴れまわり、ありすは涙をボロボロ流した。

「ウンチさせてください……ごしようですから」

涙を流し卑屈に頭を下げるありすにプロデューサーは時計を確認した。

「残念だけどトイレに言ってる間にステージ始まっちゃうから今日はそのままラ  
イブに行つてね？」

「そ、そんな……」

絶望に顔を染めるありすにプロデューサーは容赦なく彼女の尻をパァンと叩い  
た。

「ひ、ひい……!？」

尻を叩かれ背筋を伸ばすありすにプロデューサーはドスの利いた低い声で唸つ  
た。

「早く行け……それとも服を剥ぎ取られてステージに立つか？」

「ゆ、ゆるしてください……」

ゴシツと涙をぬぐい、ありすは必死に笑顔を浮かべファンの待つステージへと  
歩いて行つた。

内心はライブに集まったファンが自分の着ている衣装の下は裸だと気づいてるのではという不安とライブ中にプラグが誤って抜けてステージの上で便を漏らすのではという恐怖で気が気でなかった。

『み、みなさん……』

マイクを持ちファンの男達を見て、ありすはなるべく平静を装いながら叫んだ。

『きよ、今日は私のライブ、楽しんでいってください！』

必死にマイクに向かって虚勢を張るありすにファン達は喝采を送った。

『そ、それでは最初の歌は……』

スカートがめくれないよう小さくジャンプしながらステージの上を踊りるとファン達もサイリウムを振って応援しだした。

「ッ！」

一瞬、ジャンプの強さを誤り、短くカットされたスカートの裾が上がり過ぎて、隠さないといけない秘部が露わになった。

(ひ、ひい……)

ありすは慌てて身体をターンすることで露わになった秘部を隠し、ファン達のみ自分の痴態が映らないよう動きを激しくした。

だがそのターンが今度は裸の尻を露わにし、ありすは慌てて腰を下げた。

今度は前屈みなつた裸の乳首が衣装の中から見え、ファン達の目を奪った。

もうこうなればありすが取る行動全てがファン達の目をいやらしく返る裏目裏目の羞恥ダンスと化していた。

ファン達もありすのステージ衣装の下が裸であることに気づき、禁止されている写真撮影も気にせずシャッターを押し続けた。

ステージはありすの淫らで惨めな羞恥ダンスで興奮が収まらなかつた。

ライブが終わるとありすは逃げるように舞台から降り、自分を待っていたプロデューサーに抱きついた。

「はあ……はあ……」

いつも以上に疲れ、喋ることも出来ないありすにプロデューサーは彼女の頭を撫でた。

「いいステージだったよ♪」

「お、おねがい……うんちさせて……」

キュルルと腹が鳴りプロデューサーの服を強く握るとありすは卑屈に目をウルウルと潤ませた。

「おねいが……もうおながこわれそうなの……」

虐めてほしそうに目を潤ますありすにプロデューサーはおかしそうに笑った。

「今日のライブ、いつも以上にお客さんに大盛況だったよ♪」

「……」

見られたくないものを全て見られストリップ以上の淫らな空間となったライブ会場を思い出し、ありすは真っ赤になった。

そんな羞恥に顔を赤らめるありすにプロデューサーは撫でていた頭を離した。

「ありすちゃんはこうやって恥ずかしい思いをしてライブしたほうが受けがいいらしい」

邪悪に笑った。

「次のライブまでもうちよつとウンチは我慢しようね♪」

「そ、そんな……」

全身の血が足元まで下がり身体が凍るほどの寒気を覚えた。

「お、おねがいします……」

気づいたらスカート下の裸の尻も露わにする格好で土下座していた。

「も、もうしにそうなくらい、くるしいんです……う、うんちを」  
プルプル震え、ありすは恥ずかしさを捨て叫んだ。

「ウ、ウンチさせてください！」

大声を出し、必死に排泄を求めるありすにプロデューサーは何度か目をパチパチさせた。

「そんなにウンチしたい？」

「は、はい……」

ここから先は購入してからお読みください。

スーサン（人生負け犬社社長）